

## 妖菌時計

帆足 美伸

一時の人気にかげりも見え始めたが、「妖怪ウォッチ」というアニメが、子供たちの間でまだまだ流行中だ。このアニメを見た子供たちは、自分たちに都合の悪いことは何でも「妖怪のしわざ」にしてしまうため、教育上よろしくないとの物議をかもしたとも言われている。だが、元来、妖怪とは、人間に厄災をもたらすために異界からこの世に現れる存在であった。

日本の妖怪ブームは今に始まったことではなく、江戸時代においても妖怪絵巻や怪談は人々を魅了し、現代においても多くのコミック・アニメ（「ゲゲゲの鬼太郎」に始まり、近年では「夏目友人帳」等）に妖怪は登場し、人気を博している。そうして妖怪ブームはたびたび巻き起こり、現れては消え、消えては現れる。それはまるで、きのこの生活史（いっしょう）であるかのようだ。

筆者も妖怪の類に関する話は嫌いではなく、高知県における妖怪・妖異に関する書籍を調べていたところ、きのこにまつわる興味深い2つの怪異譚を見つけた。本稿では、それらについて紹介し、若干の考察を加えてみようかと思う。

### 「なばの怪」

平成15年に、高知県立歴史民俗資料館では、妖怪をテーマにした企画展「あの世・妖怪・陰陽師 異界万華鏡・高知編」が催された。その企画展の『展示解説資料集』の中に、「なばの怪」は紹介されている（高知県立歴史民俗資料館 2003）。

同書の解説によれば、この話は平成13年に高知県で発見された『絵本集艸』という冊子に綴られており、『絵本集艸』は「[破損] 庵一笑」により江戸後期末～明治時代初期に記されたと考えられている（『展示解説資料集』 p. 110）。なお、この冊子は個人所蔵のものであったが、現在は高知県立文学館に寄贈され、保管されている。

「なばの怪」の内容は次の通り ——

「新改村に住む木下平左衛門は、終日、薪を切りに出かけていた。夕暮れどきに戻ってきて、お茶で一服しようとしていたら、茶釜の下から大きなきのこが生えてきて、平左衛門の顔を舐めてきた。カッとした平左衛門、火吹き竹で応戦し、きのこを3、4回打ちすえると、きのこはぐったりと萎れてしまった。このきのこを汁の実にして食べた平左衛門が言うには、少し臭かったとのこと」

『絵本集艸』の「なばの怪」には、挿絵も載せられている（図1）。そこには、傘を持ち上げて伸長した柄をもつ人面茸の妖（あやかし）が平左衛門と対峙している様子が描かれており、囲炉裏にかけられた茶釜から上る黒煙は陰毛のごとく表現されている。まるで男根を連想させるかのような人面茸の描写は、「少し臭かった」という妙にリアルな味の感想とともに、この奇妙な出来事の生々しさに拍車をかけている。



図1 『絵本集州』に見られる「なばの怪」(画像提供: 高知県立文学館)

ところで、茶釜の下からきのこが発生するというのは一体どういうことなのだろう？

囲炉裏や竈(かまど)といった火を使い高温となるような場所は、きのこの生育環境として適しておらず、通常、きのこが発生することはない。

だが、きのこの中には、焚き火や山火事の跡地に発生する特殊な生態学的特徴を示す菌、いわゆる「焼け跡菌」が知られており、平左衛門が遭遇したきのこの妖も焼け跡菌である可能性が高い。

代表的な焼け跡菌としては、焚き火跡に発生してマツを枯らす植物病原菌のツチクラゲがよく知られているが、柄をもたないツチクラゲは、この怪異譚に出てくるきのこは異なる。

そこで、勝本(2010)による『日本産菌類集覧』の巻末索引から、和名に「ヤケ」がつく菌名を調べ、傘と柄をもつハラタケ型の子実体をもち、焼け跡菌と考えられるものを抜き出して

みると、ヤケアトツムタケ、ヤケノアカヤマタケ、ヤケノシメジ、ヤケノヒトヨタケ、ヤケノヒメヒトヨタケ、ヤケノワタヒトヨ(=ワタヒトヨタケ)、ヤケノヒメイタチタケの7種が該当した。

これらのうち、ヤケノヒトヨタケ、ヤケノヒメヒトヨタケ、ヤケノワタヒトヨはヒトヨタケ属(旧分類)に、ヤケノヒメイタチタケはナヨタケ属に分類され、いずれも脆い肉質の小菌で、描かれた妖怪図のイメージとはかけ離れている(おまけに食用的価値もなさそうだ)。ヤケノアカヤマタケは子実体の色調が異なる上に、焚き火跡のヒョウタンゴケの間から発生するといわれ(Hongo 1960)、発生環境にも違いがある。ヤケノシメジにいたっては、暗い色調の地味な小菌で、平左衛門の食指も動かぬだろう。従って、これらの焼け跡菌の中で、この怪異譚に最もふさわしいきのこは、ヤケアトツムタケ(*Pholiota highlandensis*)ではないだろ

うか。

本種については、『フィールドベスト図鑑14 日本の毒きのこ』に、胃腸系の中毒を引き起こす有毒種と記載されており(長沢 2003)、食した平左衛門のお腹は大丈夫だったのだろうかかと心配になる。また、スギタケ属を含むモエギタケ科のモノグラフ『Fungi Europaei 13 Strophariaceae s. l.』には、「本種の子実体の大きさと色にはかなりの変異があり、子実体の肉はマイルド〜わずかに不快な味をもつ」と記されている(Noordeeloos 2011)。なお、ヤケアトツムタケについては、『千葉菌類談話会通信』32号でも紹介されている(大久保 2016)。

これまで何もなかった場所に突然現れるきのこについては、現代でも不思議に感じる人は多いようだ。とりわけ芝生や落葉の上に描かれるきのこの菌輪は、妖精の輪(フェアリーリング)と称されるように幻想的で、何かしら良いことがありそうな、そんな予感を見た者に抱かせる。また、霊芝(マンネンタケ)のように、きのこの発生が吉祥と結びつけられた例も、中国の古文書や本草書の中に見られるようだ(小林 1978)。

だが、その一方で、きのこの発生を凶兆ととらえる見方もある。

山本ひろ子による論考(「唐金流し」と滅びた家)では、竈の灰の中から生じたきのこについて、興味深い解釈が披露されている(山本 1999)。この論考は、天明8年(1788年)に高知県の久保高井(香美市物部町)で実際に起こった豪雨による山の崩落事故から生まれた伝説[唐金(からかぬ)流し(カラ川流しとも)と呼ばれる毒漁法をおこなった久保源兵衛が、山崩れにより一族もろとも滅んでしまうというもの]についてなされたものである。

伝説では、事故が起こる前、まるで何かの警告であるかのように、竈の灰の中からきのこが発生する怪異がおこっている。

この怪異に対する山本の解釈は非常に興味深い――

「竈に茸が生えたというまがまがしい現象は、その家が衰亡するという凶兆にちがいない。なぜなら釜、すなわち火は、その家の生命活動のみなもとだから」

(「唐金流し」と滅びた家 p. 155)

「なばの怪」においても、囲炉裏にかけられた茶釜の下からきのこが発生するのは、不吉の象徴ととらえても間違いのないだろう。

高知県においては、何かの前兆としてきのこが発生する怪異が、他の伝承中にも見受けられる[「カマグラ山の怪」(市原 1977)、「牛鬼淵」(市原 1981)]。後者については、語られる人物や場所に違いがあるが、久保高井の伝説と内容が酷似しており、そこから派生した伝承であろう。

また、水木しげるの『神秘家列伝』に安倍晴明の話が見られるが、家の竈の前にきのこが生えたことについて相談にきた男に対し、「不吉なことではない」と、晴明は占いの結果を伝えている(水木 2004)。

吉祥なのか凶兆なのか、それとも何の意味も伴わないのか、面妖なきのこ達は、いつでも摩訶不思議な存在で、我々を悩ませ続ける。

## 「山の怪」

田中貢太郎の『日本怪談大全2 幽霊の館』に出てくる「山の怪」も、先と同様、高知県を舞台とした怪異譚である(田中 1995)。この話は、「青空文庫」や『文豪山怪奇譚 山の怪談名作選』(東 2016)にも収録されている。

少し長いですが、以下に内容を記す――

「長岡郡の本山という所には、時々不思議なことがおこる吉延という谷があった。

ある冬の初め、半兵衛という猟師が谷に猟に出かけ、鉄砲を隻手に獲物が来るのを待っていると、紫色に光る山ミミズがどこからか這い出してきた。すると土色をした蛙が現れて、山ミミズを飲み込んでしまった。しかしこの蛙も、

黒地に赤い斑点のある小蛇に捕らえられてしまう。

気味悪く感じていた半兵衛の目の前に、今度は灰毛の大きな野猪が不意に現れ、小蛇を一口で吞んでしまった。彼は鉄砲を撃ったが、仕留めることは叶わなかった。

猟をあきらめた半兵衛が谷の下へ帰りかけたとき、サルオガセが女の髪のようにさがった大きなツガの木の陰から、顎鬚の真っ白な老僧が半兵衛の前に立ち塞がった。

半兵衛は山刀で老僧を切りつけるが、老僧は倍の数に増えてしまう。切りつけるたびに老僧は数を増し、ついには百人ばかりの妖僧が、半兵衛に小石をぶつけてきた。

半兵衛は死に物狂いで戦い、手に触るものをなんでもかんでも投げつけていると、妖僧は徐々に逃げはじめ、とうとういなくなってしまった。

半兵衛が我にかえると、彼は顔や頭から一面に血を流しており、彼の体の周囲には自分で自分に投げつけた小石が一杯になっていた。

あたりを見廻すと、そこは吉野川の河原であった」

「なばの怪」はともかくとして、「山の怪」については、話の中にどこにもきのこが出てこないため、「きのこの怪異譚とは関係ないのでは？」と感じられる方もいるかもしれない。

だが、この話は、紛れもなくきのこの怪異譚である。

なぜなら、白い顎鬚の老僧が出てきてから増殖するまでのくだりは、きのこが出てくる狂言「くさびら」で、山伏が祈禱するにも関わらず、きのこが数を増していくさまを彷彿とさせ、明らかに「山の怪」が、この狂言をモチーフとしているものと考えられるからである。つまり、妖僧の正体とは、ツガに菌根を形成するようなツガと深い関わりをもつきのこのことなのだ（一体、本菌が何の種であるのか、色々想像して楽しんでほしい）。

また、狂言「くさびら」では、山伏が必死に祈禱するも、きのこは次から次に数を増し、ほうほうの体で山伏は逃げ出してしまう。一方、「山の怪」の半兵衛は、最後まで諦めることなく抵抗し、ついには妖僧（きのこの妖）を退散させてしまう。このことは「くさびら」との大きな違いであり、特筆すべき点である。

ところで、妖僧の出現前には、妖僧の露払いとして、森の様々な生物が半兵衛の前に姿を現すが、紫色に光る山ミミズや黒地に赤の斑点のある小蛇などは、その色彩感覚が薬物による幻覚症状を思わせ、実に印象的だ。そこには死の連鎖が付随し、これから起こる真の怪異（恐怖）を予感させる。

半兵衛が遭遇した出来事は、奇怪な谷で獲物を待つ中、極度の緊張が精神に異常をきたすことで見た山中幻覚なのかもしれない。だが、豊かな自然に包まれるこの地に立てば、妖怪の存在を信じたくもなるのだ（図2）。



図2 本山町のショウガ畑

豊かな自然の中に黄色防蟻灯の明かりが灯る。手前を流れるのは吉野川。吉延の谷はここから少し離れた場所にあったと思われる。河原に立った半兵衛の胸に去来したものは――  
（画像提供：株式会社 坂田信夫商店）

上述した2つの怪異譚で語られる土佐の男たちは、実に豪気で、豊かで厳しい土佐の風土と息吹がその気風を育んだのだと感じずには

いられない。「なばの怪」の平左衛門にせよ、「山の怪」の半兵衛にせよ、妖怪相手に大立ち回りを繰り広げ、最終的に勝利するのは実に痛快である。

平左衛門にいたっては、倒したきのこの妖を汁の実にして食べ、食後の感想まで述べているが、実はこれとよく似た設定のマンガに『ダンジョン飯』(九井諒子、KADOKAWA/エンターブレイン) というものがある。この作品は、地下のダンジョンで出合ったモンスターを倒し、調理して食べてしまうという斬新な設定が面白く、『このマンガがすごい! 2016』オトコ編で第1位にも選ばれている(『このマンガがすごい!』編集部 2015)。

だが、きのこ妖怪を打ち倒して食べてしまう「なばの怪」の設定は、『ダンジョン飯』よりはるかに時代を先取りしているのではないだろうか!

また、飯沢耕太郎は、『きのこ文学大全』の中で、「古今東西の小説、詩、戯曲などのうち、何らかの形できのこをテーマにしている文学作品」のことを「きのこ文学」と定義し、紹介している(飯沢 2008)。

そして、「なばの怪」と「山の怪」が、一級品の「きのこ文学」作品であることは言うまでもない。

## 謝辞

高知県立文学館の川島禎子氏と高知県立歴史民俗資料館の梅野光興氏には、『絵本集艸』の「なばの怪」の画像提供に際して、便宜をわかっていただいた。ここに記して、厚く御礼申し上げます。

## 引用文献

- 東雅夫 (2016) 文豪山怪奇譚 山の怪談名作選 山と溪谷社, 東京.
- Hongo, T. (1960) Notes on Japanese larger fungi (15). Journ. Jap. Bot. 35(3):83-90.
- 市原麟一郎 (1977) 土佐お化けばなし1 土佐の妖怪. 一声社, 東京.
- 市原麟一郎 (1981) 土佐お化けばなし2 土佐の怪談. 一声社, 東京.
- 飯沢耕太郎 (2008) きのこ文学大全 (平凡社新書). 平凡社, 東京.
- 勝本謙 (2010) 日本産菌類集覧. 日本菌学会 関東支部, 千葉.
- 小林義雄 (1978) 菌類民俗学と歴史資料 (2). 日菌報19: 215-225.
- 高知県立歴史民俗資料館 (2003) あの世・妖怪・陰陽師 - 異界万華鏡・高知編 - 展示解説資料集. 高知県立歴史民俗資料館, 高知.
- 『このマンガがすごい!』編集部 (2015) このマンガがすごい! 2016. 宝島社, 東京.
- 水木しげる (2004) 神秘家列伝 其ノ弐 (角川ソフィア文庫). 角川書店, 東京.
- 長沢栄史 (2003) フィールドベスト図鑑14 日本の毒きのこ. 学習研究社, 東京.
- Noordeloos, M. E. (2011) Fungi Europaei 13 Strophariaceae s. l. Edizioni Candusso, Italia.
- 大久保泰和 (2016) 焼け跡のきのこ. 千葉菌類談話会通信32: 34-36.
- 田中貢太郎 (1995) 日本怪談大全2 幽霊の館. 国書刊行会, 東京.
- 山本ひろ子 (1999) 「唐金流し」と滅びた家. 新潮 (1999年12月号) pp. 154-155.